

永原陽子編

『生まれる歴史、創られる歴史』

——アジア・アフリカ史研究の最前線から——

刀水書房 二〇一一年・四刊

A5 二二七頁 二九〇〇円

本書は、アジア・アフリカの諸地域に関わる様々な人々が残してきた史料を博搜し、多元的な視点から、まさに歴史が生まれ、創られていく生々しい過程を描き出した、「世界史の生きた現場」へと読者を誘う論文集である。目次を次に示す。

第一章「選択される過去—北部エチオピアのキリスト教徒の歴史認識」（石川博樹）、第二章「八〇〇年後の『復讐』—西南アジアにおける『ソームナートの門扉』の歴史」（近藤信彰）、第三章「清朝とコンバウン朝の狭間にある雲南のタイ人政権—一七九二年—一八一五年までの国内紛争」（クリスチャン・ダニエルズ）、第四章「植民地期の南インド史記述とその現地的起源—『ポリガール』をめぐる諸言説を中心に」（太田信宏）、第五章「マンドウメの頭はどこにあるのか—ナミビア北部・クワニヤマ王国の歴史と現在」（永原陽子）、第六章「東南アジアにイスラームをもたらしたのは誰か？—ワリ・ソングの起源をめぐる問題とアラブ系住民」（新井和広）、第七章「英系ビルマ人の歴史と記憶—日本占領期（一九四二—四五年）とビルマ独立をめぐる」（根本敬）

石川論文は、ソロモン朝後期の年代記とその史料源から、エチオピア教会の信徒がどのような過去を記録すべきものとして取捨

選択し、その歴史認識を構築したかを描き出す。近藤論文は、ガズナ朝のインド遠征から数百年を経て、「略奪された門扉」に関わる言説が英領期に生み出され、現代の宗教コミュニティ間に受容されていくまでを跡づける。ダニエルズ論文は、中華世界と東南アジア大陸部の間で、複数の異民族集団との政治交渉の上に成り立っていたタイ人政権のあり方を明らかにする。太田論文は、植民地主義的な歴史叙述と先行する現地の言説との連続と断絶を論じ、前者は英印双方の多彩な声が相互に影響しあうなかで生まれてきたことに注意を促す。永原論文は、植民地主義に抗い殺害された王をめぐる、「断頭」の伝承に焦点を合わせ、文字史料とそれに依拠する公的な歴史には表れない、植民地支配の下で生み出されてきた人々の歴史認識のあり方に迫る。新井論文は、東南アジアのイスラーム化をめぐる史料の乏しさが、多様な歴史の語りを生み出す余白となっていることを確認し、そのなかで、一九世紀以降存在感を増したアラブ系住民の歴史観が、現況を過去にあてはめる形で受容されてきている側面を指摘する。根本論文は、日本軍による占領を経て独立へ向かうビルマのなかで、混血の英系ビルマ人が置かれた苦境と将来の生の保障に向けた模索に着目し、独立後に国外へ移民した人々の肉声を紹介する。

以上、本書の諸論考は、ナショナル・ヒストリーの枠組みや単純な支配／被支配の二項対立には回収できない、複雑に絡み合った地域の歴史の生成過程を丹念に解きほぐすものである。地域の個性にじっくりと向き合った歴史研究の最前線の成果であり、どのような地域や時代に関心を持つものにとっても、裨益するところ

ろの大きな論集といえよう。

(小林理修)